文　法（理論・現代）

井島正博

世紀は二〇〇〇年を迎え，雑誌『国語学』は二〇〇号を数えた現在，否が応でも時代の転換期を感じずにはいられない。このような時期に，国語学・日本語学界の展望が私に回ってきたわけであるが，そのような時代の転換点を精確に認識し，描写できるものかどうか，責任を感じずにはいられない。現実に，現代語文法・文法理論に関する論攷は，この二年間で優に五〇〇点を越え，大方は入手して目を通すことはできたが，全体を見渡すことは個人の能力を越えており，さらに不党不偏の評価を下すことは不可能に近い。また，紙数もそれを許すものではない。そこで，ここでは，評者が，この時期の現代語文法の動向として特に進展が顕著であると認識し，また今後その分野の展開が予想されると考えられる分野を重点的に採り上げて論じて行くことにしたい。したがって，ここで採り上げられない論攷の中にも，優れたものがあるとは知りつつも，紙数の都合で割愛したものがあることをお断りしておきたい。

さて，まず近年の現代語文法の研究状況に関して，全体として評者が感じていることを概観しておきたい。八〇年代初頭，文法はそれまでの陳述論の限界が露呈してきたことに伴う逼塞状態にあった。すなわち，陳述論の理論的生産性の減退という内部事情に加え，日本語教育などの要求する個別的語法の説明が陳述論では得られないという不満，本質論（why）ではなく方法論（how）を重視し理論的枠組を道具として用いる生成文法の影響などから，文法研究の混迷状況が生じていた。そこに関西を中心とする新しい現代語文法の流れが登場して，時代に風穴をあけた爽快感があった。そこで提示された枠組には，多少不徹底なところはあったとはいえ，文法の分野にはまだ多くの研究の余地があることが目の前に突きつけられて，沢山の若い研究者が殺到したのは無理からぬことであったと思われる。ただし，枠組の不徹底さは，テンス・アスペクト，モダリティ，とりたて詞など，数年ごとの流行を生み出しはしたものの，あらかためぼしい論点が掘り尽くされると，新たな話題を求めて流行が移りゆくという風潮をつくりだした。ここで，八・九〇年代の文法研究の特徴を一言で述べれば，先にも述べた，陳述論の停滞による全体理論に対する信頼性の失墜，日本語教育による個別事象に対する説明の要求，主に生成文法による方法論の重視という時代の要請の具現として，研究者の努力が，理論の整備・体系化の方向ではなく，既成の理論的枠組を道具として精密な現象記述を行う方向にのみ向かう傾向が顕著であった，と言うことができる。

しかし，そのようにして推進されてきた現代語文法研究も，この世紀の変わり目にあって，その推進力が目に見えて落ちてきたように思われる。確かに，現代語文法に関する限り，方法論は洗練され，記述はかつてなく精密になってきた。しかしそれが今度は桎梏となって，文法研究の健全な展開を阻害しつつある兆候が現われているのではないだろうか。今後，文法研究の進むべき道として，およそ二つの方向が考えられると思う。一つには，これまで現代共通語一辺倒の研究であったのを，古典語あるいは方言との比較研究や，諸外国語との対照研究に拡大すべきであろう。特に一時に比べて古典語の研究者の層が薄くなっているのは事実である。そのように複数の言語を扱うことによって，三角測量のように議論の精度を上げることができる。もう一つには，そのような個別の用法研究以外にも，従来の文法理論の再吟味および体系化，あるいは言語現象を新たな観点から見直す理論の追究も並行して推進して行くべきであると思われる。日本語学に限らず，一時，全体理論あるいは“大きな物語”の信用失墜の思いが蔓延したが，学問あるいは科学とは統一的な理論追究の営みだったのではないだろうか。

さて近年，進展が低調であるという印象を拭いきれない現代語文法であるが，そんな中でも議論が盛んな分野として，動詞文の構造に関わる議論が見られる。このような傾向は，アメリカ言語学における，ジャッケンドフの概念意味論やラネカーのアクション・チェーン構造をもとにした認知意味論などの研究に呼応するものと思われるが，日本では，生成意味論の流れを受け継ぐ影山太郎氏の語彙概念構造論が九〇年代中頃以降注目され，この二年間には，入門書風の『形態論と意味』（くろしお出版，1999.4）が出版されるに至っている。ただし，現在は登場の際の衝撃の時期を過ぎて，客観的な検討の時期にあるようで，特に松本曜「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」（『言語研究』114,1998.12）は，影山理論の項構造レベルでの他動性調和の原則には多くの例外があることを具体的に示し，その代案として筆者の意味構造を取り入れた語彙機能文法を提示する。また，小林英樹「複合による他動化」（『国語学』192,1998.3）は，小さな問題ながら，動作名詞「着陸」がサ変動詞化するとスルが下接するが，複合語「強制着陸」が動詞化するとサセルが下接することを，語彙概念構造を用いて説明する興味深い分析である。他に，同「『VN をする』構文で使えない動名詞について」（大阪大学『現代日本語研究』5,1998.3）がある。北原博雄「移動動詞と共起するニ格句とマデ格句――数量表現との共起関係に基づいた語彙意味論的考察――」（『国語学』195,1998.12）も，移動動詞に共起するニとマデとの使い分けを限界性という概念を用いて，語彙概念構造の枠組で説明しようとする。他にも，西村義樹「行為者と使役構文」（『構文と事象構造』研究社，1998.11）は，表には立ててはないが，ラネカーの認知意味論を背景とした使役構文の分析を行っている。佐藤琢三「自動詞ナルと計算的推論」（『国語学』192,1998.3）は，計算的推論を行うナルの存在を示し，これも変化のナルと，何らかの結果への到達という意味を共有していることを論じる。山岡政紀「属性動詞の語彙と文法的特徴」（『国語学』197,1999.6）は，従

来の状態動詞という類型の中に，属性動詞という類型を新たに設けるべきことを論じている。他に，感情表出動詞について論じた同「感情表出動詞文の分類と語彙」（創価大学『日本語日本文学』9,1999.3）がある。岡田幸彦「動詞の語彙的意味と，その動詞が用いられる統語論的構造との相関関係をめぐって――空間移動を表す動詞を中心に――」（東京外語大学『地域文化研究』2,1998.3）も興味深かった。姫野昌子『複合動詞の構造と意味用法』（ひつじ書房，1999.2）は，種々の複合動詞の詳細な用法記述を行っている。他にも，動詞の自他あるいはヴォイスにかかわる論攷には，須賀一好「自動詞の派生『受かる』」（『金沢大学国語国文』23,1998.2），同「動詞『わかる』の意味と自他」（『山形大学日本語教育論集』2,1999.3），早津恵美子「『知らせる』『聞かせる』の他動詞性・使役動詞性」（東京外語大学『語学研究所論集』3,1998.3），杉本武「『雨に降られる』再考」（筑波大学『文芸言語研究　言語篇』35,1999.3），紙谷栄治「現代日本語の自動詞と他動詞」（関西大学『国文学』78,1999.3）などが見られた。

また，格助詞に関しても，必須格は述語の格支配の中で構造的に与えられる機能にすぎないと考える立場がある一方で，そもそもガ・ヲ・ニなどの形態そのものに意味があると考える立場があるが，今期は後者の立場に立つと思われるものに，有力な議論が集まった。前年末からの連載，尾上圭介「文法を考える――3・4主語③④，5・6・7出来文①②③，8述語の種類①――」（『日本語学』17-1・3・6・9，18-1・8,1998.1・3・6・9，99.1・8）では，まず主語そのものの本質を追究し，形態的にはガ格で表わされるものであるが，意味的には事態認識の中核であると結論付けている。続けて，ラレルが表わす受身・可能・自発・尊敬などの意味には，事態全体の出来という共通性があると論じている。宇都宮裕章「ヲ格の境界性――『範囲』を定める格としての認定――」（『静岡大学教育学部研究報告』48,1998.3）は，ヲをガあるいは助詞なしと比較して，一方では内部視点としての〈個別性〉，他方では外部視点としての〈全体性〉を表わすが，いずれにせよ〈境界性〉を表わす点で共通していると論じる。菅井三実「日本語における空間の対格表示について」（『名古屋大学文学部研究論集』45,1999.3）は，認知意味論の枠組を用いて，対格表示は，空間的な移動における，起点・過程・着点のうち，過程をプロファイルしたものであり，それ以外はそこからの拡張として説明できると論じる。他に，同「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」（『名古屋大学文学部研究論集』44,1998.3）がある。大島資生「現代語における主格の『の』について」（『国語学』199,1999.12）は，主格表示のノの統語的・意味的特性を検討し，それが用いられる節が主節に対して“従”であることを明示すると結論付ける。また，同「現代日本語における『X の』の諸相」（『東京大学留学生センター紀要』8,1998,3）は，ノの用法を全体的に通観したものである。矢澤真人「『へ』格と場所『に』格――明治期の『へ』格の使用頻度を中心に――」（筑波大学『文芸言語研究　言語篇』34,1998.10）は，近代にへ格の領域をニ格が侵食していったありさまを計量的に論証する。

また，副助詞・係助詞は，沼田善子「とりたて詞」（1986.4）以来，「とりたて詞」とい

う呼称が定着しつつあるが，そこで設けられた枠組の批判的検討の上にこれまでにも多くの成果が公にされている。今期も，興味深い論考が見られた。森山卓郎「例示の副助詞『でも』と文末制約」(『日本語科学』3,1998.4) は，デモやカ何カは，複数例示が可能なナドと異なって，単一例示しかできないが，さらにその中でも，デモは要素を暫定的なものとして一要素を抽出するという取り出し方 (暫定抽出) であり，カ何カは並列的要素集合をもつ中での一例の提示 (一例並列提示) であることを論証している。菊地康人「サエとデサエ」(『日本語科学』6,1999.10) は，サエとデサエとの区別は，前者は述語を含む句の対照，後者は名詞句の対照であるということを論証している。茂木俊伸「とりたて詞『まで』『さえ』について——否定との関わりから——」(筑波大学『日本語と日本文学』28,1999.3) は，沼田 (1986.4) ではまったく同じ記述となるマデとサエに関して，サエは常に否定を含むW (広) スコープをとるが，マデは否定を含まないN (狭)・W両方のスコープをとりうると論じる。安部朋世「ダケの位置と限定のあり方——名詞句ダケ文とダケダ文——」(『日本語科学』6,1999.10) は，ダケの位置の相違はスコープの位置の相違に還元されるのではなく，特にダケダ文は命題内容が「不充分である」というような含みを付け加える機能を担っていることを示している。同「『とりたて』のクライ文の意味分析」(『筑波日本語研究』4,1999.10) は，「最低限」を表わすとされるクライが用いられる文は，〈実現可能性が高い〉と発話者が評価する事態(期待)であるという含みを持つと論じている。井本亮「『ほど』構文の解釈と主文の有界性について——述語動詞句の動詞分類を中心に——」(『筑波日本語研究』4,1999.10) は，ホド句が表わす，主語が大量・目的語が大量・事象回数が大量・行為の量が大量・非常の程度・一回の強い動きといった意味と，動詞の種類との相関を，ジャッケンドフの概念意味論を援用して説明している。

名詞述語文に関しては，一方では八〇年代に，AハBダの中のA，Bという名詞句それぞれに，「指示」「叙述」という概念をあてはめて措定文・指定文といった文の類型化をはかった議論や，G.フォコニエのメンタル・スペース理論を応用した議論が注目された。天野みどり「『前提・焦点』構造から見た『は』と『が』の機能」(『日本語科学』3,1998.4) は，特に後項焦点のガ構文があることを示して，従来の枠組の修正を迫る筆者の一連の論考の中に位置付けられる。熊本千明「コピュラ文の語順と解釈——名詞句の意味特性に注目して——」(佐賀大学『研究論文集』3-1,1998.12) は，指示-叙述理論の中で議論を展開してきた筆者の枠組をもとにして，ハリディその他の名詞述語文の分析を評価したものである。他に，佐藤雄一「ガ分裂文をめぐって」(『千葉大学留学生センター紀要』5,1999.3) もある。また，井島正博「指示の理論としての指示-叙述理論」(『成蹊国文』31,1998.3)，同「指示の理論としてのメンタル・スペース理論」(『成蹊人文研究』6,1998.3) は，それらの研究を全体的に評価したものであり，同「名詞述語文の多層的分析」(『成蹊大学文学部紀要』33,1998.3) はそれらをもとにして名詞述語文の機能を全体として考察したものである。

条件表現も，近年究明が進んできた分野であるが，今期も展開が見られた。赤塚紀子「条件文とDesirabilityの仮説」（『モダリティと発話行為』研究社，1998.5）は，条件文の前件と後件とは，いずれも望ましい（desirable）内容であるか，いずれも望ましくない（undesirable）内容であるかのどちらかであると論じる。有田節子「プロトタイプから見た日本語の条件文」（『言語研究』115,1999.3）は，①前件Pが成立する世界を仮定する，②その仮定世界での後件Qの成立を推定するという，二つの条件を満たすものを条件文のプロトタイプとみなし，その拡張の仕方の違いとして日英語の相違を説明する。同「テハ構文の二つの解釈について」（『国語学』199,1999.12）は，テハ条件文の条件的解釈と反復的解釈を階層上の位置の相違として分析する。前田直子「非仮定的な事態を接続するト・タラ文の意味・用法」（『東京大学留学生センター紀要』3,1998.3）は，トは語りの表現で，タラは話し手の体験の報告の表現で用いられることに伴う使い分けがあることを論じている。さらに，今期は逆接に関する論攷が目立った。丹羽哲弥「逆接を表す接続助詞の諸相」（大阪市立大学『人文研究』50-10，1998.12）は，逆接の接続助詞をさまざまな構文的事実をもとに，反推量希求型のノニ・ニモカカワラズ・トハイエ，自由対立型のガ・テモ・ナガラ（モ），程度量型のモノノに類型化する。中溝朋子「『逆接』の接続表現の『対比用法』と『展開用法』について――会話における『けど』を例に――」（東京外語大学『日本研究教育年報』1998.3）は，前件から語用論的推論によって得られる内容が，後件によって破棄される関係（破棄関係）によって，ケドの対比用法も展開用法も説明しようとしたものである。石黒圭「逆接の基本的性格と表現価値」（『国語学』198,1999.9）は，逆接関係そのものが成立する条件を四つに分けて論じる。同「逆接の予測――予測の読みの一側面――」（『早稲田日本語研究』6,1998.3）もある。他に，田中寛「『テモ』の周辺――『テデモ』をはじめとして――」（『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』10,1998.3），馬場俊臣「接続表現の省略可能性について」（北海道教育大学『札幌国語研究』4,1999.5），同「複合接続詞の体系的考察の試み――動詞の条件表現形式による複合接続詞を対象として――」（北海道教育大学『語学文学』37,1999.3），岡部寛「ダカラとソレデの違いについて」（大阪大学『現代日本語研究』5,1998.3），甲田直美「関係表現の系譜」（『滋賀大学教育学部紀要』48,1998.3）などが興味深かった。

引用表現に関しては，特に，ト・ノ・コトの使い分け，あるいは動詞の類型などに関して，これまでさまざまな提案がなされてきたが，いまだ最終的な結論には至っていないように見える。今期も興味深い議論が散見された。鎌田倫子「内容節をとる動詞のコトとノの選択規則――主動詞の意味分類と節の時制から――」（『日本語教育』98,1998.10）は，コトとノとの使い分けを，①主語が必須か常に空か，②内容節が時制節である場合，実現形か未実現形か，③内容節の主動詞の他動性が高いか低いか，という三つの基準の組み合わせによって決まるとする。橋本修「『伝える』『述べる』と『こと』補文・『の』補文の分布」（『筑波日本語研究』3,1998.10）は，「伝える」と「述べる」とに関して，ノ補文は前者の方が許容度が高く，コト補文は前者には叙実性があるが後者にはないことを論証す

る。渡辺ゆかり「ヲ格補文の『叙実性』と『の』」(『広島女学院大学日本文学』9,1999.7)は,〈叙実性〉という概念を,客観的な出来事の実在以外に,主語による出来事の実在の当然視あるいは仮定にも拡大すると,そのような意味での何らかの〈叙実性〉がなければノは用いられないことを論証している。他に,菅野高志「『の』『こと』の使い分けについての一考察――ヲ格の名詞節の場合――」(慶応大学『日本語と日本語教育』26,1998.3)もあり,この問題の解決にはまだ時間がかかりそうである。また,藤田保幸「引用文の構造」(『国語学』198,1999.9)は,これまで引用文を追究してきた筆者の研究の要約として,引用句はコトバのイコン記号であるという主張を軸に,その構造・類型を通観する。他に,同「従属句『～カ(ドウカ)』再考」(『滋賀大学教育学部紀要』47,1998.3),同「項目列記の『～ト』表現の本質」(『滋賀大学教育学部紀要』48,1999.3)がある。小野正樹「態度動詞の分類――補文に対する動詞の分析の提案――」(筑波大学『文芸言語研究　言語篇』35,1999.3)は,いわゆる引用動詞を直接知覚・間接知覚・認知・思考・感情といった精神活動の種類によって分けるべきことを,種々の意味的な特徴・構文的な特徴によって論じる。阿部忍「引用節のタイプ分けにかかわる文法現象」(『山手国文論攷』20,1999.3)は,従来の補足的引用節をとる認識・伝達動詞と,付加的引用節をとる認識・伝達に関わりのない動詞との中間に,展開的引用節をとる感情・態度動詞があることを論証する。江口正「日本語の間接疑問節の文法的位置付けについて――不定的同格要素として――」(『九大言語学研究室報告』19,1998.3)は,間接疑問節は,数量詞・不定代名詞などと同じく,不定的同格構文を構成すると論じる。他に,同「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」(『愛知県立大学外国語学部紀要』30,1998.3)がある。また,加藤陽子「話し言葉における引用の『ト』の機能」(『世界の日本語教育』8,1998.6),同「話し言葉における『トイウコトダ』の諸相」(筑波大学『日本語と日本文学』8,1999.3)も興味深かった。

指示語に関しては,あらかた議論が出尽くした観があるが,庵功雄「テキスト言語学の理論的枠組みに関する一考察」(『一橋大学留学生センター紀要』1,1998.7)は,それをハリディ風のテクスト文法に拡張しようとしている。同「名詞句における助詞の有無と名詞句のステータスの相関についての一考察」(一橋大学『言語文化』35,1998.12)もある。また,坪本篤朗「文連結の形と意味の語用論」(『モダリティと発話行為』研究社,1998.5)も文連結の種々相を通観しているという意味では同趣旨の議論であろう。松本哲弥「『この』『その』による集合内要素の照応について」(『筑波日本語研究』3,1998.10)は,指示語の先行詞の特徴を議論している。他に,三枝令子「文脈指示の『コ』と『ソ』の使い分け」(『一橋大学留学生センター紀要』1,1998.7)などが見られた。

副詞についての研究もいくつか見られたが,佐野由紀子「比較に関わる程度副詞について」(『国語学』195,1998.12)は特に,渡辺実氏の程度副詞「もっと」類を,「XはYよりA」という文において,「XだけでなくYもAである」という前提を持つ「もっと」類と,そのような前提を持たない「ずっと」類とに二分する。他に,同「程度副詞と主

体変化動詞との共起」（『日本語科学』3,1998.4）がある。副詞の意味分析に関する論攷は，他にも多く見られたが割愛する。

テンス・アスペクト研究は，八〇年代に一度ピークを迎えたが，そこで問題の複雑さが露呈して，しばらく停滞していた。しかし最近，やっと新しい切り口がほの見えてきた観がある。金水敏「近代語の状態化形式の構造」（『近代語研究』10，武蔵野書院，1999.10）は，テイル・テアルの相違を統語構造レベルで解明し，さらに歴史的な展開をたどっている。他に，中畠孝幸「結果を表す構文について――テアルとラレテイル――」（『三重大学日本語学文学』10,1999.6），副島健作「現代日本語の不完結相」（『日本語科学』4,1998.10），同「不完結相について――日本語・英語・ロシア語対照研究の試み――」（『奥田邦夫先生退官記念論文集日本語教育学の展開』渓水社，1999.2），守屋三千代「日本語の継続相再考――日韓対照を通して――」（創価大学『日本語日本文学』8,1998.3），三宅知宏「日本語の付帯状況文」（『国文鶴見』34,1999.12），橋本修「『前―』『翌―』等を修飾する節のトキ解釈」（筑波大学『文芸言語研究　言語篇』33,1998.3），岩崎卓「連体修飾節のテンスについて」（『日本語科学』3,1998.4），同「マエ節・アト節内のル形・タ形について」（『光華日本文学』7,1999.8）などが見られた。

形式名詞述語文に関しては，ノダ文研究の第一人者による，佐治圭三「『～のだ』補説」（京都外語大学『無差』6,1999.3）が，これまでの主要な説を検討して，ノダ文は，他の事態に対して既定の内容を提示するものである，と自説を繰り返しているように，今期は足踏み状態にあるように思える。それでも，ノダ文に関して，福田嘉一郎「現代日本語のノダと主体的表現の形式」（『熊本県立大学文学部紀要』5,1998.12），楠本徹也「ノダ文におけるノの認知作用に関する一考察」（『東京外国語大学留学生日本語教育センター紀要』25,1999.3），妻木淳子「文末形式『のだ』の情報論――命題と話し手の認識――」（『大阪大学日本学報』18,1999.3），その他，谷守正寛「ムードの『わけだ』再考」（『鳥取大学教育学部研究報告』49-2,1998.9），藤井ゆき「一般的傾向性の『ものだ』から事態認識・評価の『ものだ』（いわゆる感慨の『ものだ』）への文法化」（『今田滋子先生退官記念論文集日本語教育の交差点で』渓水社，1999.2）などが見られた。井島正博「形式名詞述語文の多層的分析」（『成蹊大学一般研究報告』30,1998.2）では，形式名詞述語文の全体像を素描しようと試みた。

モダリティ研究も低調に見えるが，そんな中でも，疑問文分析に進展が見られた。安達太郎『日本語疑問文における判断の諸相』（くろしお出版，1999.6）は，疑問文，なかでも否定疑問文に関して，特に「傾き」という現象がどのように表現の中に反映されるか，あるいは情報要求と情報提供との相互関係を中心に，丁寧に全体を見渡した力作である。井上優・黄麗華「日本語と中国語の省略疑問文『αハ？』『α呢？』」（『国語学』192,1998.3）は，一見よく似た働きをする日中の表現間にも，ハが主題を表わし，呢が対立事項の存在を表わすために，用法にズレが生ずることを明らかにする。宮崎和人「否定疑問文の述語形態と機能――『（ノ）デハナカッタカ』の位置づけの検討――」（『国語学』194,1998.9），同「確認要求表現としての『ダロウネ』」（『日本語科学』6,1999.10）は，（ノ）デハナイ＋タある

いはダロウ＋ネという足し算では説明できない機能を明らかにする。その他，九〇年代の階層的モダリティ論の枠組を下敷きにした研究が多く見られたが，そのアンチテーゼとして，大鹿薫久「叙法小考」（関西学院大学『日本文芸研究』50-4,1999.3）などは興味深かった。他に，重見一行「『だろう』における談話管理的機能の成立について」（兵庫教育大学『言語表現研究』15,1999.3），野林靖彦「類義のモダリティ形式『ヨウダ』『ラシイ』『ソウダ』――三水準にわたる重層的考察――」（『国語学』197,1999.6），丹保健一「『ようだ』の意味をめぐって――様態，推量，伝聞，婉曲を中心に――」（『三重大学教育学部研究紀要』50,1999.3），大場美穂子「いわゆる様態の助動詞『そうだ』の意味と用法」（『東京大学留学生センター紀要』99,1999.3），花薗悟「条件形複合用言形式の認定」（『国語学』197,1999.6），同「希望形式の過去――『～したかった』の文について――」（東京外語大学『日本研究教育年報』2,1998.8），中畠孝幸「当然を表わすモダリティ形式について――ハズダとベキダ――」（『甲南大学紀要　文学篇』3,1999.3），奥田靖雄「現実・可能・必然（下）――しなければならない――」（『ことばの科学』9,むぎ書房，1999.7），田村直子「命題要素のモダリティ化について――ナケレバナラナイやテモイイ等を例に――」（『筑波応用言語学研究』5,1998.12），雨宮雄一「現代日本語における義務論理的表現――『して(も)いい』『しなければならない』をめぐって――」（『大阪大学日本学報』18,1999.3），福島和郎「終助詞『よ』と『ね』の性質」（『文教大学国文』27,1998.3），福田恵子「終助詞『よ』の現れる発話分析」（『拓殖大学日本語紀要』9,1999.3），深尾まどか「終助詞『よね』について」（言語文化研究所『日本語教育研究』38,1999.12），堀川智也「希望喚体の文法」（『大阪外国語大学論集』18,1998.3），石神照雄「呼称と指示――感動喚体の構造補遺――」（信州大学『人文科学論集文化コミュニケーション学科編』32,1998.3），同「文に於ける呼格と述格」（信州大学『人文科学論集文化コミュニケーション学科編』33,1999.3）などが見られた。

また，これまで見てきた分野には入りきれなかったが，他に今期に出版された著書として，城田俊『日本語形態論』（ひつじ書房，1998.1），山中桂一『日本語のかたち――対照言語学からのアプローチ――』（東京大学出版会，1998.1），張威『結果可能表現の研究――日本語・中国語対照研究の立場から――』（くろしお出版，1998.4），佐伯哲夫『要説日本語の語順』（くろしお出版，1998.10），児玉徳美『言語理論と言語論――ことばに埋め込まれているもの――』（くろしお出版，1998.10），石綿敏雄『現代言語理論と格』（ひつじ書房，1999.2），西垣内泰介『論理構造と文法理論――日英語のWH現象――』（くろしお出版，1999.3）などがあった。

ここで紹介できた論攷以外にも，近年，語用論，特に会話分析あるいは談話分析をはじめ，関連性理論，ポライトネス理論，修辞理論など，新しい切り口の研究が着実に増えつつあることを実感した。余裕がなく，ここでは紹介できなかったが，今後，話し手・聞き手を含んだコミュニケーションの場を組み込んだ議論が盛んになり，文法理論としてもそのような理論構成が要求されるものと予想される。

――東京大学助教授――